TAD

2018 夏

TAKE FREE ¥0

Vol. 4

TOHOKU AKINDO DESIGN

私流

特集

東北を活かす

yourwear
［ニットデザイナー］
佐藤 孔代

アカオニ
［デザイナー］
小板橋 基希

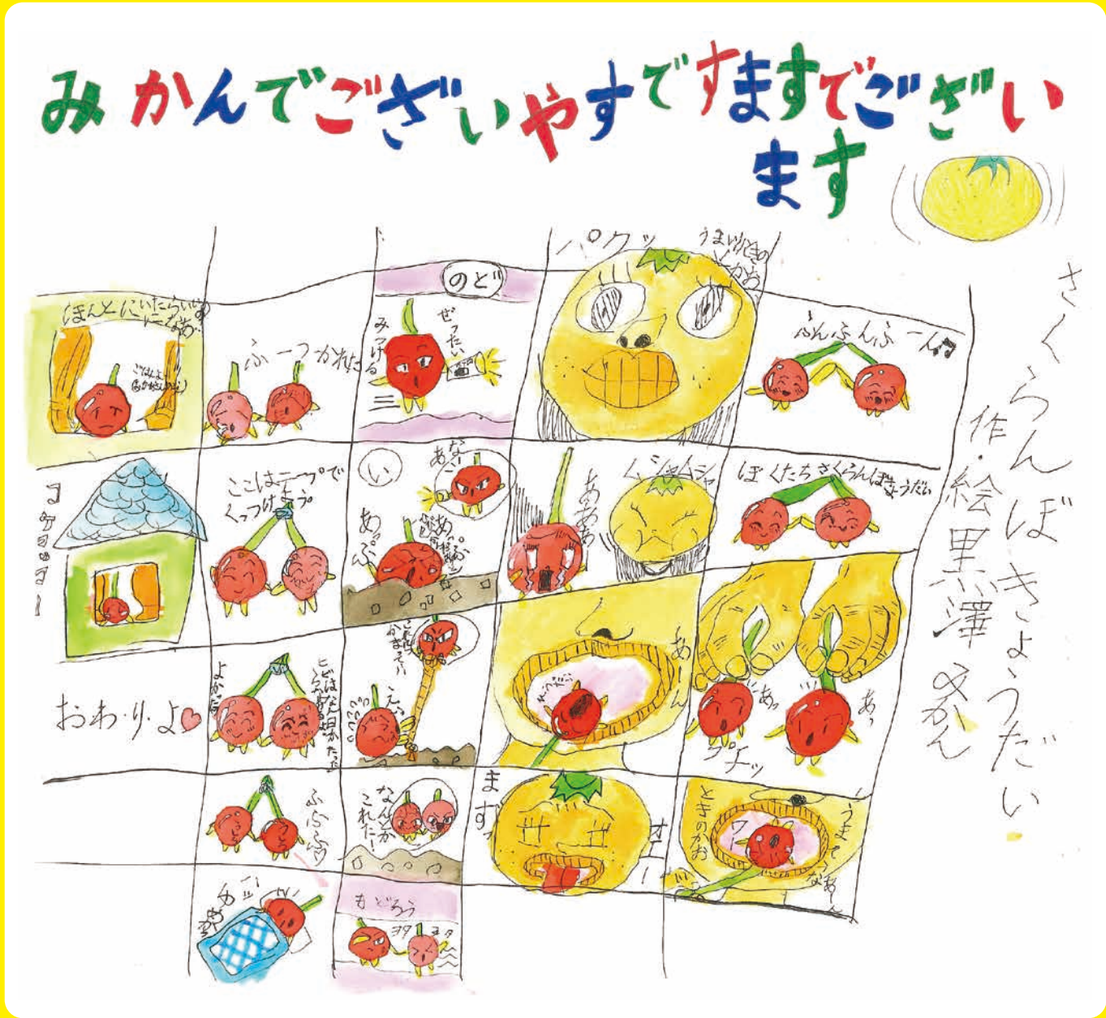
いでは堂
［映画監督］
渡辺 智史

アンバーロンド
［クラフトビール伝道師］
田村 琢磨

とうほくあきんどでざいん塾

TAD とうほくあきんどでざいん 2018 夏 / Vol. 4 | 発行日 6月 年 改訂版 | 発行 東北アキンド商品開発研究会事務局/仙台市産業振興センター

とうほくあきんどでざいん塾



黒澤みかん

2010年生まれ。小学２年生の漫画家のタマゴ。アシスタントは兄。すきな芸人は（恋している）、みやぞん。趣味は運動。すきな食べ物は、みかん。

ふんふんふーん♫／ぼくたちさくらんぼきょうだい／あっ　あっ　プチッ／あーん　（うまそうなときのかお）　ワー／バクッ　（うまい！ときのかお）／ムシャムシャ　あああー／あーん　そうだ！／オエー　まずっ／（のど）　ぜったいみつける／（あな）（い）あっぷ　あっぷ（ひび）／これにつかまって!!　えいっ／なんとかこれた！／もどろう　ヨタヨタ／ふーつかれた／ここはテープでくっつけよう。／ヒビはなん日かたったらなおるよ。　よかった／ふふふ♡（うしろ）（うしろ）／ハッ　ゆめかっ／ほんとうにいたらいいのになあ…　ごはんよー（おかあさんのこえ）／コケコッコー／お・わ・り・よ♡

頭を過ることがある。
弱冠8歳の作者に見えているものは、実はかつて誰もが持っていて失ってしまった視点で、特別なことではないのかもしれないと。
そう考えると、人はある意味で、「可能性」を失いながら大人になるのだ。
それがわかっているから、ぼくらはじわじわとこの漫画に惹きつけられてしまうのかもしれない。

——写真家／フォトグラファー
嵯峨 倫寛

CONTENTS

02 特集
私流 東北を活かす

06 ニットを軸に東北らしく ―― yourwear［ニットデザイナー］ 佐藤 孔代

12 チームでつくることを楽しむ ―― アカオニ［デザイナー］ 小板橋 基希

18 山形から社会を見つめて ―― いでは堂［映画監督］ 渡辺 智史

24 ビールの個性を広め深める ―― アンバーロンド［クラフトビール伝道師］ 田村 琢磨

30 ききみみずきん スイス編

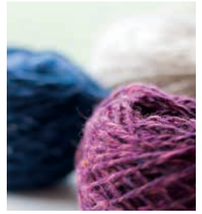
34 連載 第1回 純愛アタック!! 地底の森ミュージアム編

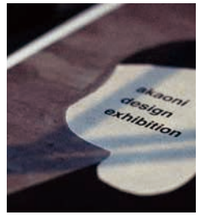
38 僕とTシャツと夏休み コンノケンジのお買い物。

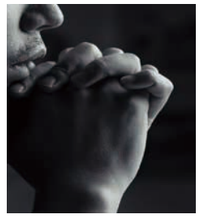
39 連載 第4回 雑草からパクチー

42 ROSEBUD TAROT READING 夏秋の運勢

44 協働クリエイター略歴







表紙デザイン：くろさわ かな

私流は、手探りの先に。

幸せに生きるために、必要なこととは？
公衆の面前で声に出すと、いろんな意味で心配されそうなこの問いの答えが、特集を制作する上での指針になるはずと信じて長いこと考えた（黙って考えている分にはバレない）。そうして私が出した答えは3つ。「必要とされていることを実感できること」「それ自体に楽しさ、おもしろさを感じる行為が日常化していること」という2つの精神的要素と、衣食住を基本とする生きるための物資を調達するための「お金」だ。

1日24時間。改めて言うことでもないが、私たちが使える時間は有限だ。その中で効率よく3つを得ていくためには、ある程度並行して3つにアプローチしていく必要がある。もちろんベストは一石三鳥な方法だ。「そんな最高な仕事が、東京にはあるのか」。なんて思った人はいないだろうが、念のため。東京だろうが東北だろうが、「一石三鳥」を引き当てられることなんて、ほぼない。用意されている選択肢は、用意した側の都合でつくられた汎用品。あなただけにぴったりと合うわけがないのだ。

仕事は仕事、余暇は余暇。それはそれで1つの選択、尊重されるべきだ。ただ、2つを我慢しながら1つを追いかけることに時間を使うなんて、もったいないことはしたくない。そう思ったら、諦めるべきではない。ゴールが見えなくても、手探りで次の一手が打てるなら考えながら打ち続ける。次第にそれは一石三鳥な「私流」になっていくだろう。感触が画一化されてしまった東京よりも、個性の感じ取りやすい東北のような「地方」での方が、それはうまく形になるのかもしれない。そう思わせてくれた4つの「私流」を、じっくりとご覧いただきたい。

特集

私流

届ける力／まちを読む力

初心の力／組み合う力

東北を活かす

めいっぱい自分らしさを発揮し、地域とともに働き暮らす。
職種も住む場所も異なる4名の「私流」から、東北を活かすヒントを探る。

文・工藤 拓也／アートディレクション・スカイスター／撮影・嵯峨 倫寛

今、全国ほぼすべての地方自治体で、労働人口の流出が問題になっている。
進学で首都圏に出た学生は「帰っても仕事がない」とそのまま就職し、
かつてそうして地元を離れた30〜40代は、
「帰りたい」と思っても仕事を理由に断念することが多いという。
しかし、実際に暮らしてみればそんなことはない。
東北にも、いきいきと働き暮らす人たちはたくさんいる。
その働きぶり、暮らしぶりを知ってもらうことで、1人でも多くの人に
「東北でも楽しくやっていけるかも」と思ってもらいたい。
これが、本企画の原点にある想いだ。
さまざまな方をご紹介したいと思いながら、
ご登場いただく上で二つ外せない条件があった。

一つは、自らの意志で東北で働くことを選んでいるということ。
経緯や理由はそれぞれだが、4名ともに
何らかのメリットを見出した上で選択している。
もう一つは、東北という地域の特性や、
そこに暮らす人との関係性を活かす働き方をしているということ。
裏を返せば、それは東北だから、
その土地だからこそできる働き方とも言えるのだ。
東北で楽しく働き暮らしたいと考えている人にとってはもちろん、
どうすればそういう人たちに働く場所として、
暮らす場所として選んでもらえるのかと考えている
企業や行政の方々にもヒントになれば嬉しい。

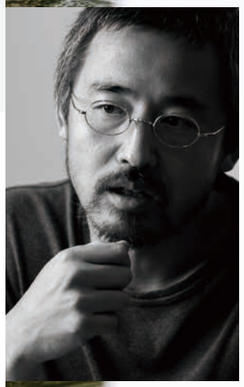
ニットを軸に東北らしく

1976年、秋田県大館市生まれ。ファッションジャーナリストのアシスタント、大手アパレルブランドのニット部門デザイナー職を経て独立。友人と、布帛とニットのブランドを5年ほど運営した後、2010年にyourwear設立。2014年に大館市に戻り、以来ご近所さんにも生産を手伝ってもらうスタイルでブランドを運営する。

yourwear 代表　ニットデザイナー
佐藤 孔代
sato michiyo

チームでつくることを楽しむ

1975年、群馬県中之条町生まれ。進学とともに山形県に移住し、卒業後、そのまま山形で仲間たちと事務所を立ち上げ、写真撮影とデザインの仕事を始める。2004年アカオニデザイン設立。以来、山形の仕事をメインにさまざまなクリエイティブワークを手がけ、2016年には社名をアカオニとし、東北、全国と活動範囲を拡大中。



株式会社アカオニ 代表　デザイナー
小板橋 基希
koitabashi motoki

山形から社会を見つめて

1981年、山形県鶴岡市生まれ。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」がきっかけで、映画の道を志す。飯塚俊男氏のもとでドキュメンタリーの制作を一から学び、『よみがえりのレンビ』の制作を機に帰郷。「観た後のアクションを引き出すまでがドキュメンタリー映画の仕事」という信念を持ち、配給も手がけるスタイルでドキュメンタリー映画を制作する。

有限責任事業組合いでは堂 代表　映画監督
渡辺 智史
watanabe satoshi

ビールの個性を広め深める

1976年、宮城県仙台市生まれ。学生時代にドイツを訪れ、現地で飲んだビールに魅せられ飲食の道へ。2008年にバースタイルのクラフトビール専門店「アンバーロンド」をオープン、今年6月に10周年を迎えた。スマートフォンアプリやイベントなど、さまざまなアプローチでクラフトビールを文化として根づかせるための活動を展開している。

アンバーロンド 店主　クラフトビール伝道師
田村 琢磨
tamura takuma

ニットを軸に東北らしく
私流 初心の力
01

暮らしに仕事を編み込むように

yourwear［ニットデザイナー］佐藤 孔代
sato michiyo
デザイン／スカイスター

仕事観の原点にある、素敵な大人たちとの出会い。

「洋服が大好きで、それ以外の仕事をするっていう発想がなかったんです」

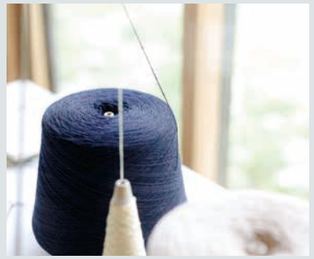
高校卒業後、東京の服飾専門学校へ進学したときの心境を、佐藤さんはこう振り返る。熱い想い、というのとは違う、穏やかだが芯がある言葉だ。服をつくる仕事に就きたくて選んだ進路だったが、卒業後すぐに就いたのはファッションジャーナリストのアシスタントだった。就職先が決まらず、学生時代のバイト先にそのまま就職というかたちではあったが、彼女にとってとても大きな経験になったという。業界の中でも大御所の先生で、「先生の身につけているものや、一緒に連れて行っていただいた海外の展示会などから、物を見る目を養わせていただきました」と言うが、一番の学びになったのは仕事に対する姿勢だった。

「打ち合わせに出る前に栄養ドリンクを飲んで、みたいな感じで毎日ハードだったんですけど、先生はそれでもいつも楽しそうにお仕事をされていました。一緒にお仕事をされている方たちも、みなさん楽しんでいて、それがすごく素敵に見えて。ファッションの仕事って、楽しんでこそなんだって教えてもらいました」

忙しくも充実した日々を送ること2年半、「やっぱり服をつくりたい」と思い直し大手アパレルブランドに入社。デザイナーとして配属された先でニットと出会い、その魅力にどんどんのめり込んでいくことになる。

「専門学校で学んでいたとはいえニットについては知らないことばかりで一から勉強させていただきました。すでにある生地を使うのではなく、1本の糸から編地自体をデザインしていく。そんなニットの自由度の高さに惹かれていきました」

日々ニットのおもしろさを噛みしめながら、少しずつその存在感が大きくなっていくのを感じていた。一方で、フリーランスとは違う大きな組織での不自由さに対する違和感もまた、大きくなっていったという。入社してぴったり3年が経ったとき、佐藤さんは会社を辞めることを決断する。



より長く、心地よく、使っていただきたい。

そんな想いから、yourwearではお直しサービスを行っている。
たとえば、長年かぶって伸びてしまったニットキャップ。編み直すことできゅっと締まった元の形に戻すことができ、また長く使えるようになるという。
こだわり抜いて選んだ糸は、肌触りがよいだけではなく、耐久性も高いのだ。
状態によっては難しいものもあるそうだが、引っかけてしまったもの、虫に食われてしまったものなどの補修も行っている。

将来を重ね合わせ、理想の関係性を模索する。

現在、通いでお手伝いいただいているご近所さんは2名。その他、自宅作業の編子さんが2名。それぞれの方の都合に合わせて、できる範囲で仕事をお願いしているそうだが、「いっぱい仕事をしたい」という方もいるという。要望に合わせるのは簡単なことではないはずだが、そういう方にもバランスよくお願いできるように「もっと仕事をつくっていきたい」と佐藤さんは言う。もともと繁忙期を乗り切るために採用したこの生産スタイルは、運用を続けるうちに彼女にとって少し違った意味合いを持つようになってきた。

「60歳になった自分を想像すると、元気でまだまだ働きたいだろうなって思うんです。でも、フルタイムで働くほど体力はないだろうし、ごはんをつくったり孫の面倒を見たり、家のこともやらないといけない。お手伝いに名乗り出てくださる方も同じ状況なんだろうなと思うと、できるだけ希望に応えるべきだと感じて。より多くの女性が、プライベートとバランスを取りながら働ける場をつくっていけるといいなと思っています」

暮らしと仕事を近づけ、東北らしく生きる。

再び大館に暮らし始めて4年、「東北の暮らしがますます楽しくなってきている」と言う佐藤さん。週末は郷土玩具探しに夢中なんだとか。

「東北って、全国的、さらに世界的に見ても郷土玩具が比較的たくさん残っている土地なんです。多くは農閑期に副業としてつくられてきたものなんですが、それが長く残ってきたのは、今でも農業が生業として土地に根づいている証拠で。そう考えると、副業を持つことって東北らしさの一つだと思うんです。yourwearも楽しんで活動できていますが、東北を改めて知るうちに『より東北らしい仕事』にも挑戦したい気持ちが徐々に大きくなってきてしまって。40歳を過ぎてはじめて洋服以外のものに目が向いているのも、東北という土地のおおらかさ、奥の深さ故だと感じています」

東北の生業が生み出したものに惹かれる。それは、自らの将来の暮らしを見据え、新しい働き方を提供する佐藤さんにとって、ごく自然なことだ。暮らしに仕事を編み込むように、彼女はまた一歩踏み出そうとしている。

余り糸を集めて編み上げるyourwearのミトン「BLUE BOX」は、すべてが一点もの。
素材を大切にするブランドの姿勢は、製品の付加価値にもなっている。

らしさを深め、互いを活かす

アカオニ［デザイナー］小板橋 基希 *koitabashi motoki*

デザイン／くろさわ かな

映像学科への転科から、すべてが始まった。

親の会社が測量関係だったこと。親戚に建築家がいたこと。漠然と、デザインに興味があったこと。大都市への憧れが、あまりなかったこと。高校で熱中したスキーの聖地、蔵王が近かったこと。

群馬で生まれ育った小板橋さんが、東北芸術工科大学の建築学科を選んだのは、こんな理由からだった。山形での学生生活は楽しかったそうだが、それに反して学べば学ぶほど建築に対する違和感は大きくなっていったという。原因がわかったのは3年時、就職活動が始まった頃だった。

「もともと映画が好きで、自分はそっちに進みたいようだと気がついたんです。親には『もう1年頑張れ』と言われたんですが、気持ちが完全に映画に向いていたので頼み込んで転科させてもらいました」

映像や写真を撮ることは純粋におもしろく、学生生活は今まで以上に楽しくなっていった。さらに、大学で身につけたスキルを活かして山形市内の結婚式場で撮影のバイトも始めた。現場で経験を積むにつれ、撮影後の写真のセレクト、編集、アルバムの仕上げまで一連の作業を任されるようになった。

時を同じくして、小板橋さんはMacを購入。独学でソフトの操作を習得し、グラフィックデザインの仕事も受けるようになっていた。少しずつ仕事が増え、卒業前には写真とデザインで「セミプロみたいな感じ」になっていた小板橋さん。東京に出るより、地元群馬に帰るより、このまま山形で仕事をする方がスムーズだと考え、気の合う同世代の仲間と組織を立ち上げることにした。

穏やかな口調で、自身と会社について振り返る小板橋さん。おもしろエピソードも織り交ぜながら自然体で話す姿は、コーポレートメッセージの「アカるく、すなオニ」そのもの。

気づいたときには、デザインが仕事に。

卒業後すぐに、大学の友人同士でもあるバイト仲間4人で立ち上げたのは、写真とデザインの事務所。アシスタントの経験もない若者だけでのスタートだったが、日々忙しく働き回ることでなんとか生活していくだけの収入は得られていたという。そうして半年が過ぎた頃、小板橋さんはある大変なことに気がつくことになる。

「自分だけ、徹夜でデザインの仕事をする機会がやけに多いことに気がついて。話をしてみたら、みんなはデザインができないことがわかったんです」

忙しいわけである。4人のうちデザインできるのが、小板橋さんだけだったのだ。さすがにこの体制で続けていくのは難しいと判断し、すぐにデザインチームを別の友人たちと3人で立ち上げた。アカオニデザインの誕生である。1年後には2つの組織を合併させ、法人を設立。その間、初期メンバーの脱退やスタッフの雇用などにより、グラフィック、web、写真という現在の業務内容に近い形態になっていった。

自分を信じ、深め、つかんだ手がかり。

そこから約15年。今や県内や東北のみならず、全国から仕事の依頼がくるデザイン事務所となったアカオニ。新卒で組織を立ち上げ、ここまで続けてきた過程には、どんな苦労があったのだろう。

「学生時代のバイトで、手を挙げればチャンスをいただけることはわかっていたので、営業で苦労をしたことは実はありません。ただ、クオリティへの不安はありましたね。もちろん、その時々で自分の中の1番をつくってきましたが、すべて自分で決めなければならなかったので、迷うことも多々ありました」

多くのデザイナーが独立前に「修行」を経験するが、そこで身につけられる大きなものの一つに、デザインを見る目がある。その経験がない小板橋さんは、意識的にたくさんの物を見るようにしてきたという。映画、建築、レコードジャケット。自分が興味のある物の中に「好きなデザイン」を探し続け、山形という場所で自分ができる「いいデザイン」とはなにか考えながら、とにかくつくり続けた。やっとの思いで手がかりを見つけることができたのは、ある農家さんのweb制作をしているときだった。

「畑で生産者のおじさんとおばさんを撮影したカットがすごくいい写真で、『あ、こういうことか』って思えたんです。つくりこんだ広告表現とかスタジオ写真みたいなものじゃなくて、ドキュメンタリーとプロモーションを混ぜ合わせたような表現なんだなって。こういうことをおもしろがるのが、自分が山形でやりたいデザインなんだなって思ったんです」

試行錯誤の連続だった、はじめてのブランド。

「先生のようにフリーランスで仕事をしていきたい」

そう考え始めていたところに「一緒にブランドをやらない？」と声をかけてくれたのは、舞台衣装の仕事をしていた専門学校時代の友人だった。迷うことなく友人は布帛（ふはく）、佐藤さんはニット、お互いが得意分野を担当するかたちでブランドをスタートさせた。当時アパレル業界は好景気で「なんとなく売れると思っていた」と言うが、立ち上げ当初はまったくと言っていいほど売れなかったそうだ。

「全然売れなくて、本当に困りました。あまりに売れないので自分たちで商品を持って都内のお店を1軒ずつ回って、ようやく決まったのが2軒。そんな感じのスタートでした」

苦労したのは営業だけではない。当時から、手編みのものと工場生産のものをつくっていたが、継続的に生産を引き受けてくれる工場がなかなか見つからなかったのだ。

「生産数が少ないから、工場さんにとっては手間の方が大きいんです。その年お願いできても翌年断られる、みたいなことを何度も繰り返していました」

さまざまな苦労を乗り越えながら、手探りでなんとか進むこと5年。少しずつ2人のつくりたいものの方向性に違いが出てきたこともあり、佐藤さんは新たにブランドを立ち上げることを決意する。

2010年、「yourwear」は当時佐藤さんが暮らしていた神奈川県の大磯でスタートした。展示会などへの営業活動を軸に取引先を増やし、9年目を迎えた現在まで少しずつながら着実に売り上げを伸ばしてきた。その裏には、「力みすぎて、空回りばかりしていた」という前ブランドでの経験を教訓にした、大きな方針転換があった。

「『常に新しいものをつくって売らなくちゃ』という強迫観念みたいなものがあって、自分が本当にやりたいことを見失っていたんです。大きなブランドではなく、長く続くブランドを目指していたことに気がつき、その場しのぎではなく、長く生産を引き受けてくださる工場さんに発注先を変え、シンプルな定番商品のみのラインナップにしました。そうしたら、気持ちも楽になり少しずつうまく回り出していったんです」

初心に帰り、故郷に戻り、見つけた独自のスタイル。

立ち上げから4年。軌道にのり始めた頃に、佐藤さんは故郷大館への移住を決める。仕事ではなく将来の暮らしを考えての選択だったが、それがブランドにとってさらなる追い風になった。

「大館に移ったことで取材していただく機会が増えたんです。関東にいた頃よりもそういう機会は減るだろうなと思っていたので、驚きました」

メディアへの露出に加え、ニットがイメージしやすい雪国に拠点が移ったことで期せずして一気に注文が増え、あっという間に生産が追いつかなくなった。「突然のこととはいえ、乗り切らないと」。なんとか捻り出したのが、ご近所さんに手伝ってもらうというアイデア。佐藤さんは生まれ育った町内を回り、ネームタグを縫いつけたり、ニットキャップのポンポンをつくったりするような簡単な作業からお願いしていったという。yourwear独自の生産スタイルは、こうして始まったのだ。

ご近所さんに来てもらうときには、佐藤さんも工房で一緒に手を動かすことが多いという。
小さな頃に芽生えたものづくりへの想いは、しっかりと彼女の中に息づいているのだ。

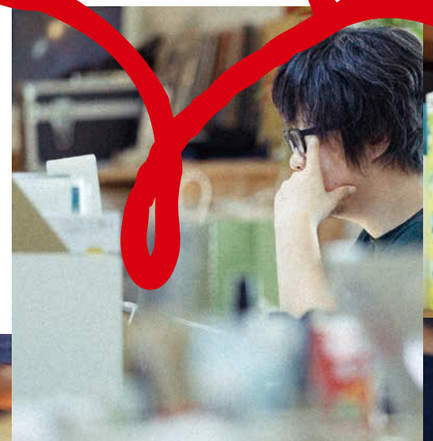
価値観を認め合う、楽しさと難しさ。

最初の事務所立ち上げ以来、常にチームとして動いてきた小板橋さん。新卒で組織をつくること自体が東北では珍しいことだが、メンバー構成にも特徴がある。デザインやブランディングという仕事の認知度の低さからか、東北で流通するデザイン分野の仕事、特にさまざまなスキルが求められるトータルブランディングの仕事は、首都圏に比べて圧倒的に少ない。一部の大きな組織を除き↘ほとんどがデザイナーだけ、カメラマンだけというような職能を絞った集団なのもそのせいだろう。立ち上げ時からさまざまなスキルを持つメンバーでチームを組んだことには、どんな理由があるのだろう。

「組織にしたのは、みんなでワイワイやることを楽しみたいと思ったからで、いろんなことができるメンバーを集めたのは、一つの仕事をいろんな切り口から考えられた方がおもしろいし、いいものがつくれると思ったからですね。デザインしかできないと、どうしても領域が狭くなっちゃうので。おかげさまで、トータルでブランディングするような仕事をいただく機会も増えてきていますし、日々楽しく仕事させてもらっています」

小板橋さんの他に、立ち上げからのメンバーはwebデザインをメインで担当してきた後藤さん1名。この「代謝のよさ」もアカオニの特徴と言↘えるだろう。

「いろんなメンバーが入っては出て行きましたね。時間をかけて育てたメンバーが抜けていくのは、経営的にはマイナスかもしれません。ただ、デザイナーとして譲れない部分があったり、アカオニではできないことに挑戦したいという気持ちがあったりして辞めていくメンバーが多いので、そこは尊重したいんですよ。自分の気持ちに嘘をつきながらい続けてもらうのも、違いますしね」



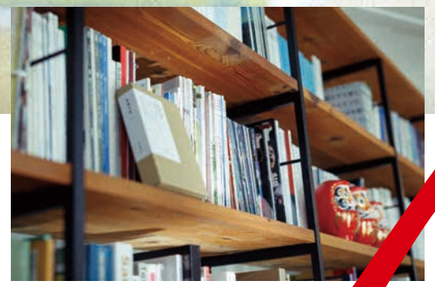
加速する出会いを、楽しみ続けたい。

新陳代謝を繰り返し、昨年アカオニに大きな変化が起きた。立ち上げ時に3名いたカメラマンが、ついに0になったのだ。一見損失のようにも見える

この変化は、新たな人の流れを生み出すきっかけになったという。

「外部クリエイターと一緒に仕事をする機会が増えてきているんです。今まで社内で行ってきた撮影はもちろん、仕事量の増加とともにいろんな機能を求められるようになったこともあり、本当にさまざまな方と地域を越えて仕事をさせてもらっています。はじめて出会う職業の方もいらっしゃって、刺激的で勉強になりますし、やっぱりみんなでつくるのが楽しいんですよね」

自らの価値観を信じて突き詰め、ありのまま表に出すことで、仲間や地域の持ち味を活かしてきた小板橋さん。どんどん広がるフィールドで、この先どんな化学反応が起きていくのか、楽しみでならない。



真に地域に根ざした映画を

いでは堂［映画監督］ 渡辺 智史 *watanabe satoshi*

デザイン／板橋 友幸

映画の仕事がしたい。渡辺さんがはじめてそう思ったのは、高校生のときだった。きっかけは、岩井俊二監督の作品。もちろん、ドキュメンタリーではない。

「映画なんて借金つくって帰ってくるだけだからやめろ」。ご両親に相談すると、一蹴された。しかし、次なる興味の対象を見つけるまでには、さほど時間がかからなかったそうだ。「親の言うことをきちんと聞く程度には真面目だったので」と言いつつ、次の手も必ずしも「サラリーマン」にならなくていい選択をしたのは、「いい会社入って出世してみたいな、親の価値観に抵抗したかったんだと思う」と照れ臭そうに振り返る。そうして入学したのが、東北芸術工科大学の建築学科。映像を諦めての選択だったがどんどんハマっていき、講義では飽き足らず建築雑誌のバックナンバーを読み漁っていたという。そんな毎日を送ること半年。どっぷりと浸かっていた建築の世界から、自らすすんで出てくるほどの「決定的な出会い」が訪れる。

突きつけられた想いの強さと、現実の厳しさ。

山形国際ドキュメンタリー映画祭。1999年、6回目を迎えていたこの映画祭との出会いが、映像の世界に憧れていた地点に、彼を一気に引き戻した。

「デジタルビデオでも応募ができるようになってきた頃で、フィルムのものもデジタルのものも、ベテラン監督が撮ったものも、カメラ回して1年そこそこの若手が撮ったものも、すべて同じスクリーンで上映されている。普段は、明確なヒエラルキーがある建築の世界を見ていたので、そのフェアな感じが新鮮で、すごくいいなと思ったんです」

その翌年、2000年代に入ると、デジタルで撮影したものをコンピュータで編集し、プロジェクターで上映することが、特別なことではなくなった。技術革新に伴い、映像制作という行為が、急に一学生にも手の届くところに降りてきたのだ。

卒業後、渡辺さんは山形市に残り、ある農村をテーマにした自主ドキュメンタリーの制作をはじめる。日中は村に行きカメラを回しながらひたすら住民の話を聞き、夜はファミレスのバイトで制作費や生活費を稼ぐ。そんな生活を続けること1年、どうしても越えられない壁にぶち当たる。

「撮るには撮ったんですけど、それをまとめることができなかったんです。結局学生時代の先輩にお願いしてまとめてもらったんですけど、あまりにも自分ができなくて、結構ショックでしたね」

しかし、それでも映画への想いは消えなかった。映画を仕事にするとはどういうことなのか。身をもって学ぶため、渡辺さんは上京することを決めた。

自分があまりにも編集ができなくて、かなり落ち込みましたね。

撮影もできる、演出家を目指して。

勢いよく飛び出したはよかったが、あてがあったわけではない。住む場所や環境は変わったものの、バイトで生計を立てる日々が続いた。プログラムで映像をつくってみたり、ビデオアーティストに憧れてみたり、映像制作においても「路頭に迷っていた」と言う。このままではまずい。藁にもすがる思いで彼が電話をかけたのは、山形の映画祭で出会ったドキュメンタリー監督だった。「手伝ってほしいから、来てくれ」二つ返事で会社へ走ると、すぐに入社が決まった。

入社したのは、ドキュメンタリーに特化した映像制作会社。とは言っても、人員は社長と自分の2人。予算規模の大きな仕事は外部スタッフとともに制作したが、予算の都合で2人で制作することも珍しくなかったという。もともとカメラマン志望であった渡辺さん、右腕になってほしいという社長の意向もあり、入社当初はカメラを回していたが、現場で経験を積むにつれ演出技術の必要性を感じるようになっていった。

「デジタル化に伴い、予算規模は小さくなっていく一方、撮影1本で食べていくのは難しいと感じたんです。その頃はドキュメンタリーでいくと決めていたので、『撮影もできる演出家』を目指すことにしました」

こうして、企画を書くところから携わるようになったのが入社2年目頃からのこと。テレビシリーズやビデオパッケージなど、レギュラー仕事がない会社で一から企画を学べたことは、今とても大きな力になっているという。

「企画を書き、お金を集めないことには、仕事がはじまらない。つまり、何も撮れないわけです。そんな条件で何十年も生き抜いてきた社長から企画を学ぶことができたのは本当に大きな経験でした」

故郷が教えてくれた、つくる意味、届け方。

社長と2人、映像制作に没頭すること3年。独立後、はじめて撮ったのは湯治場をテーマにした作品だった。やっとの思いで撮り終え配給会社に持ち込んだまではよかったが、その作品の劇場上映は大阪でのみ、あとはすべて自主上映で終わった。完成後の作品の運用を決めるのは、制作者ではなく出資者。知ってはいたはずの業界のルールは、思った以上に高い壁であることを思い知らされた。

日本では、毎年約600本の邦画が公開されているそうだが、日の目を見ない作品の数はそれ以上だという。ましてドキュメンタリーは、フィクションよりもとっつきにくいものだと思われがちだ。この苦い経験から、映画業界の現状、そこにおけるドキュメンタリーの位置づけをしっかりと見据えたことが、配給まで自ら行う渡辺さんのスタイルの原点にはあるのだ。

映画を撮り編集するだけでなく、自らも出資をし、上映交渉のために劇場に直接足を運び、作品がお客さまに届く瞬間も見届ける。次なる作品、伝統野菜をテーマにした『よみがえりのレシピ』で早速このスタイルを導入し、見事300近い場所で上映することに成功した。そして、多くの方に作品が届いたことからさまざまなアクションが生まれたという。

「伝統野菜を育てる農家さんや、それを扱う飲食店が増えたり、伝統野菜保存のための研究会が生まれたり、観ていただいた方々のアクションを通じて、社会のニーズが見えてくるようになりました。それを受けて、上映後にトークイベントやシンポジウムをやってみたり、会場でマルシェをやってみたりすると、それに対するアクションが返ってくる。こういう社会とのコミュニケーションを生み出すことがドキュメンタリーをつくる意味であり、またそこから社会の問題意識を拾い上げることが、作品づくりにもつながっていくんですよね」

その後「地域エネルギー」と「老い」をテーマに映画を撮った渡辺さん。「湯治場」「伝統野菜」「地域エネルギー」という最初の3本は、いずれも地域に根ざした作品を制作してきたが、本当の意味で地域に目が向いたのは、『よみがえりのレシピ』制作のために戻った地元鶴岡市で東日本大震災を経験してからだという。

「農村の記録から映画づくりを始めたこともあり、地域に密着して映画をつくってきましたが、どこか違うところを向いてつくっていたことに気づかされました。実際、2本目の『よみがえりのレシピ』をつくり終えたらカナダに武者修行に行こうと思っていましたし。中央集権的な経済至上主義など、それまで疑いもしなかった価値観が根幹から崩されて、ローカルへの意識が目覚めたんです」

撮影をほぼ完了し、これから編集という段階で震災が起きたことで、『よみがえりのレシピ』の仕上がりは大きく変わった。「本当に届けるべき人の姿が明確になった」からこそ、多くの人のアクションを生み出すことができたのだろう。

写真提供／映画「おだやかな革命」より　ⓒいでは堂

大切なのは、届け方も含め一つの作品として仕上げること。

地域とともに、映画をつくり続けていく。

地元に戻ってからは、LLPを立ち上げ配給も含めた映画制作を行ってきた渡辺さん。現在は同世代のスタッフ2名とともに事業を展開しているが、映画業界で働いてきた経験があるのは渡辺さんだけだ。経験者に声をかければ、移住は難しくても、制作のために一時的に来てもらうことは可能だろう。しかし、あえてそうはしない。

「スキルがある人を呼べば早いのかもしれませんが、『地域おこし』みたいな名目で地域間でそういう人たちの奪い合いになりつつあることに違和感があるんです。日本全体という視点で見たら、あまり意味がないというか。配給は、自分自身もゼロから手探りでやってきたことなので、未経験でもやれるはずなんです。外から人を連れて来るのではなく、地域の人と一緒に学び合いながら映画をつくり続けていきたいですね」

渡辺さんには、近い将来地元に編集スタジオをつくる構想がある。自身の作業効率化のためだけでなく、地元の方々とともに映画づくりをする拠点にしたいのだという。鶴岡市がドキュメンタリー映画のまちと呼ばれる未来も、そう遠くはないのかもしれない。

04

ビールの個性を広め深める
私流
まちを読む力

仙台のまちが、文化としてのクラフトビールを。

アンバーロンド［クラフトビール伝道師］
田村 琢磨
tamura takuma

デザイン／エンドウナツミ

TOHOKU SENDAI
Craft Beer
TAMURA TAKUMA

ドイツでの出会いに導かれ、飲食の道へ。

はじめて飲食業に触れたのは、学生時代のアルバイトだった。もともと料理に興味があって飛び込んだ世界だったが、選んだお店はバー。田村さんの関心がお酒へと移っていったのは、ごくごく自然なことだった。そして、学生時代に訪れたヨーロッパでのある出会いが、彼の歩む道を決定づけることになる。

「ドイツに行き、土地ごとにさまざまな味わいのビールがあることを知り、そのどれもがおいしいことに衝撃を受けたんです。それまでは日本のビールと、大手の輸入ビールくらいしか飲んだことがなかったので、本当に驚きましたね」

クラフトビールに魅せられ、大学卒業後バイト先のバーにそのまま就職。厨房、カウンター、ホールなどさまざまな業務を経験しながら、飲食業の「いろは」を学んでいった。時間の経過とともにクラフトビールへの愛もどんどん深まっていき、独自に勉強を重ねながらオーナーに相談し、クラフトビールのラインナップを充実させていった。

仙台でおもてなしを「読む」、経験する

田村さんが本格的に独立を考え始めたのは、2005年頃。東京に飲食店巡りに出かけたことがきっかけだった。

「クラフトビール専門店が増え始め、そういうお店を紹介するような雑誌が創刊され、社会的にもクラフトビールのムーブメントが起きつつあって。この流れはいずれ仙台にも来るなと感じました。当時仙台には、ドイツビールの専門店とベルギービールの専門店があったんですが、カフェやレストランのようなお店で。差別化を図りつつ経験を最大限に活かすには、バー業態のクラフトビール専門店だなと思ったんです」

翌2006年、仙台ではじめてのオクトーバーフェストが開催された。開催者に直接かけあいボランティアスタッフとして参加した田村さん。イベントの盛り上がりを肌で感じ自分の予想が間違っていなかったことを確信したという。仙台のビール熱が少しずつ高まりを見せていた2008年6月、アンバーロンドをオープンする。

「仙台にも流れが来つつあったし、不安よりも、たくさんの人においしいビールを飲んでほしいという気持ちの方が圧倒的に大きかったですね」と独立を決めたときのことを振り返る。

確信を持って開業できたのは、12年という長い時間をかけて仙台で飲食業の経験を積み、首都圏との関係性も含め、仙台というまちの動静を見てきたからこそだろう。開業後の店の運営にも、その経験は存分に活かされている。

ドイツやベルギーのビールを中心に取り扱っていたが、都内の専門店で苦味の強いビールや度数の高い黒ビールなど、欧米のビールを扱う動きがあれば即座に取り入れてきた。そして、営業を続けるうちに「首都圏の後追い」ということ以外にも、仙台にはさまざまな特性があることに気づかされたという。

「ビジネス的には大企業の支店が多く、観光的には東北の玄関口になっているのが仙台というまちなんです。だから、宮城・東北のビールを飲みたがる県外のお客さまが多いんです。仙台の方にとっては、逆に国内の他地域のビールの方が珍しい。お客さまに合わせてビールをおすすめできるよう、宮城・東北のビールはもちろん、国内のさまざまなビールを扱うようになりました」

学生時代に現地で飲んで以来ファンになり、開業当初からお店で提供し続ける田村さんのイチオシ、ドイツのシュナイダー・ヴァイスビア（右）。2010年には醸造所・直営ビアレストランを訪問しオーナーと交流を図り、2014年には感謝状（上）を受け取っている。

ソーセージのように、マスタードとザワークラウトが添えて供される「アンバーロンド焼餃子」。クラフトビールと合うように、宇都宮の餃子メーカーにアレンジを加えてもらっている一品だ。

一杯をつなぎ、人を動かす。まち全体が盛り上がっていくしかけを。

仙台というまちの特性を活かして情報を収集し、先を読みながらお店を運営してきた田村さん。2012年のオリジナルスマートフォンアプリ「Social Beer」のリリースを皮切りに、情報に合わせて動くだけでなく、自ら情報を発信しさまざまなことをしかけることにも力を入れてきた。

「『Social Beer』は、当店で提供しているビールについての読みものコンテンツや、飲んだビールを記録したり、SNSに投稿したりする機能を持っているアプリです。仙台オクトーバーフェストで提供するビールについても掲載することで、広くクラフトビールを知ってもらうきっかけにできたと思います」

2014年には、仙台市域でクラフトビールを飲むことができるお店を掲載した「仙台ビールマップ」を制作・発行。更新を続け、今年の6月に第4弾を発行した。マップには競合である他店も掲載されているが、そこには田村さんの仙台のクラフトビールシーンへの熱い想いが込められていた。

「食事を楽しむついでにビールも、いろんなビールを少しずつ飲みたい、飲みながらビールトークがしたい。クラフトビールを飲むことができるお店って業態がいろいろで、集まるお客さまもそれぞれに違うんです。それらを一つのマップに掲載することで、お店でマップを見つけたお客さまが、違うお店を訪れる。そうすれば、もっともっと仙台にクラフトビールファンが増えると思うんですよね。もともと地元にあったお店はもちろんですが、近年東京から進出してきたお店にも『お客さまの回遊を促し、一緒にクラフトビールで仙台のまちを盛り上げていきたい』ということを伝え、同意してもらった上で掲載させてもらっています」

ビールをより一層おいしく味わうための豆知識たっぷりの「Social Beer」(上)。さまざまな業態のお店が掲載されている「仙台ビールマップ」(下)。

日常的に飲んでもらえる、文化としてのクラフトビールを目指して。

地域と一体となって、クラフトビールシーンを盛り上げていきたい。この想いに共感する人は多く、さまざまな方からの声がけもあり、田村さんはついに主催の1人としてイベントを手がけることになる。2015年10月に1回目が開催された「仙台クラフトビールフェスティバル」だ。

「首都圏はもちろん、東北でも岩手、福島、秋田では当時からクラフトビールのイベントは開催されていて、やりたいなとは考えていたんです。もともとゼロから物事を立ち上げるのは好きですし、醸造所やイベント関係者の方からも『田村さんにやってほしい』と背中を押していただき、挑戦することにしました。多くの方から力を借りてこぎつけた、開催初日。自分のお店はオペレーションがうまくいかず、長蛇の列ができてしまい謝って回っていると、あるお客さまが『ありがとね。こういうビールイベント、仙台ではじめてだから、楽しみにしていたよ』と言ってくださって。思わずがっちり握手をかわし、ブースに戻って泣きましたよね」

この6月で10周年を迎えたアンバーロンド。8月31日から3日間にわたり、3回目となる「仙台クラフトビールフェスティバル」を開催するなど、ますます精力的だ。

「『広める、深める』というのが今年のテーマなんです。イベント出店やビールマップなどのツールをうまく使ってたくさんの方にクラフトビールを『広め』、お店に来ていただきおいしいビールを味わっていただきながらコミュニケーションを通じ『深め』ていく。仙台宮城のクラフトビールシーンのアイコン、伝道師としての自覚を持ち、より多くの方々に魅力を伝えていきたいですね」

流行ではなく、文化としてクラフトビールが仙台に根づき、東北に全国に広がっていく日まで、「クラフトビール伝道師」田村さんの挑戦は続いていく。

ききみみずきんは
よいずきん
かぶれば
いろいろ
きこえてくるよ

ききみみずきん

スイス編

その一．エディション・フィンクの働き方

文・斧澤 未知子

気がついたらスイスにいた。大学に進学し、大学院にも進学し、うろうろしたりきちんと働いたりの年月を経て、そうして気がつけばスイスでまた学生になっていた。〈所変われば品変わる〉だろうなと思いながら上手くはない英語で渡り歩くスイスは、とはいえ日本と似てるような、やっぱりそうでもないような。

このコーナーは、そんな私が偶然ながらも行き合わせたスイスという土地で、周りの人の考え方に耳を欹（そばだ）ててみようというものである。

・・・

今回話を聞いたゲオルク・ルティスハウザー氏は私がスイスに来てすぐにインターンとしてお世話になったアートブック[*1]のデザイン・出版スタジオの主宰である。彼は「スイスで最も美しい本」「世界で最も美しい本」といった栄誉ある賞を受賞する優秀なデザイナーでありつつも、同時にただ冗談の好きなチャーミングな人物でもあって、そんな人物のチャーミングさが、どうやら活動の仕方にもそのまま染み出しているような感じがする。

そんな彼の来し方と働き方、その周辺に広がる活動について聞いてみた。

これはスイスの山

〈ききみみずきん〉をかぶったかのように知ってるような知らないような声に耳を澄ませるコーナー

話し手：Georg Rutishauser（ゲオルク・ルティスハウザー）上写真・左
1963年、スイス出身。チューリッヒのHöhe Schule für Gestalung（現Zürcher Hochschule der Künste（チューリッヒ芸術大学））で教育を受けた後、アーティストとして活動し、出版活動へ。アートブックパブリッシャーedition finkを主宰。本という物体のあり方と意味まで考え抜いたユニークなアイデアをデザインに生かすことで評価が高い。代表作に、絶版になった既存のアート／アーティストブックを内容はそのままにサイズを縮小し一種類の紙にモノクロ印刷してポケットブックとして再版するfink twiceシリーズ（「スイスで最も美しい本」受賞）など。http://www.editionfink.ch/

文・聞き手と翻訳：斧澤 未知子（おのざわ・みちこ）上写真・中
1984年、兵庫県神戸市出身。大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻建築工学コース卒業。建築アトリエ事務所、大手組織設計、建築外アルバイトなどを経験した後、東北大学大学院せんだいスクール・オブ・デザイン科学技術振興研究員を経て2015年よりフリーランスの何者か。2016年11月よりスイスに渡り、edition finkでインターン、その後チューリッヒ芸術大学デザインのマスターコース（視覚コミュニケーション）へ入学。TAD 2017夏号〜2018春号ではフィクショナルな広告とストーリーを組み合わせた「広告とフィクション」を連載。

○彼のお仕事○

始めに、どんな仕事をしてるのか、何で本の道に入ったのか教えてくれる？

自分はエディトリアルデザインと出版をしてるよ。キュレーターやアーティストに会って、本の企画と構想を練るところからレイアウト、紙の選定、製本方法まで含んだデザインをして、本ができたら流通のための手続きや発送とか、アートブックフェア[*2]に持って行ったりするんだ。本をデザインするようになったのは、美術学校の時に、美術館で展覧会をする友人に本の制作の手伝いを頼まれたのが最初で、自分にはグラフィックデザインも本の制作も経験はなかったんだけど、頼ってくれたのは嬉しかった。それで沢山の本を見て他の人たちのやり方を理解しながら自分たちの方法を探していった。当時は組版や画像処理みたいな作業まで含めて印刷所の仕事で、主に職人が手作業で進めていたからすべての工程に時間がかかったけど、そのおかげで印刷所で本の制作過程をじっくり見て学ぶことができた。その後、その本が上出来だったので展覧会のキュレーターが他の出版物のデザインも依頼してくれて、仕事として本のデザインができるようになって、その後の出版活動に繋がったんだ。

じゃあ、そこからすぐに出版者として活動していったの？

いや、美術学校を出てからは友人のマティアス・クーンとアーティストチームとして活動していて、それと並行して美術館やアーティストの本のデザインをしてたんだ。そういう経験を通して自分で出版プロジェクトを始めるのは面白いだろうなという考えが芽生えてきて、それでマティアスとのチームを解散する時にこれまでアートに使っていた時間を出版とブックデザインに使おうと決めた。その頃、文芸の出版社でパートタイムの仕事も始めた。その収入でスタジオを借りてアーティストや美術館とのプロジェクトを実現できたし生活もできて、学びも多い良い機会だったけど、数年やって違和感を感じ始めたんだ。アーティストや美術館のために本を作ってるのに、生活のために別の仕事をしてるというのは、美術館の本のために自分が奉仕してるようなものだから。そうじゃなくて美術館の仕事が自分の生活を支えるべきだと思ったんだよ。それで出版社を辞めて、それから今までは何とかやってきた。

一事務所は一人でやってるの？

基本は一人だけど、プロジェクトによっては外部の専門家やデザイナーとも協働するし、ちょうどいいプロジェクトと希望があればインターンも受け入れてる。インターンはただの労働力じゃなく、議論してアイデアを展開し一緒にものを作るための相手（パート）だね。それに学校で教えていない自分にとってはインターンを受け入れることが知識と経験を若い世代に伝える教育の機会だと思ってるし、自分がインターンから多くを学んでもいる。一人でやってるのは孤島にいるようなものだけど、インターンは船に乗って新しい空気を持ち込んで来てくれるんだ。

1. アートブック…写真集や図録など、アーティストの作品を収録した本。アーティストが本を表現媒体として作る「アーティストブック」を指すことも。インタビューのゲオルク氏が主宰しているのは、大手出版社に対して非常に小規模な、一つのタイトルで多くても発行部数千部程度の、所謂インディペンデントなスタジオである。
2. アートブックフェア…「アートブックフェアというものをご存知か。そこでは各々のパブリッシャーが、長机一つ程度のブースに陣取りその上に商材（アートブックだ）を広げ、自らはそのテーブルの後ろに、稀にして嬉々と、大半は所在なさげに目を泳がせながら、ちんと腰掛けている。パブリッシャーの他にアーティストも数寄者も混じり色々いる。（…）これは創作・表現活動の媒体として本を選んだ人々の血と涙と笑顔と決意の成果の展示即売会である。今日では世界のあちこちで独立したフェアが開かれていて、そして、そう、この世にはアートブックパブリッシャーという、基本的には金にもならないのに本を作ることに心血と人生を注ぎ込んでいる稀有な人々がいる。彼らは世界のブックフェアに、本でぎゅう詰めの重みからたまに車輪が破損するスーツケースを持って、あるいはその重みのせいでバカ高い送料が笑える宅急便の力を借りて、息を切らせて馳せ参じる。まさかと思われるかもしれないが、そういう人がどのブックフェアにも実際に溢れているのだから見てみるがよい。…（斧澤未知子、『東北アートブックフェア』より抜粋）
3. 「インターンは…」…綺麗事でこう語る人も多いが、彼の場合は本気であり真実である。

○ 色々な活動 ○

事務所でのデザイン・出版以外にも、「スイスで最も美しい本（MBSB）」[*4]展覧会場でのポップアップショップや、レコードショップのOOR[*5]での本棚の担当など、色々してるよね。

これらは全部、本を読者の手元に届けることだね。アートブックみたいに規模の小さな分野では従来の商業的な本の売り方はもう上手く機能しないので、何か別の活動に組み合わせた場所を展開すべきだと思ってる。MBSBでのポップアップショップは1年に1度開催される展覧会に組み合わせた出店で、パブリッシャー、デザイナーとして他の本を見ること自体にすごく興味があるし、本屋をするとそれが自然に自分に起こるのもいいね。

OORはどんな店？

OORのメンバーはデザイナーやアーティスト、DJとして活動していて、レコード屋とか本屋もしたいけど、仕事として全部の時間を割くのは難しいと考えてる人たち。各メンバーが自分の興味分野を担当することで店内のジャンルの幅が広がり、それぞれ単独でやるより店にアクセスする人も多く見込める。ある興味を目的に来た人が、別の分野のものに出会う可能性があるのもいいよね。自分は「フィンク&フレンズ」という名前で店内の本棚を担当してる。フィンクの本だけからスタートして、折々に他の出版者を招待し、その本を展示販売してるんだ。その後はその中からいくつかのタイトルを本棚に加えていく。こうすることで時が経つほど本棚に色んな出版社が混ざっていく。元々、そういう場所は必要だけど、出版活動に加えてスペース運営を両立するのは難しいと考えてた。でもこれならー週間に5日開いていて、誰でもいつでもフィンクの本にアクセスできるし、自分はー カ月に2、3日割けばいい。

他の流通方法についてはどう？

今、収入は基本的にすべて本にまつわる仕事から得てるけど、その中でもデザインと出版での収入が主で、流通は中々収入にならない。実際、自分たちの本は美術館、アーティスト、キュレーター、パブリッシャーの間で交換されることが多くて、お金を経ずに人手に渡る場合がすごく多いんだよ。正直、売上で流通コストを補えればまだいいほうだけど、それを経て本が然るべき読者の手元に辿り着くのだから必要なことだと考えてる。[*7]でもこれをビジネスだとは言えないね。よく、自分のような小さなインディペンデントパブリッシャーやデザイナーがしていることは産業の研究開発部門の役割に似てると思う。企業では、投資して、失敗も経ながら得た結果が生産活動の中で実践されていくよね。ブックデザインでも自分たちのようなデザイナーがインディペンデントな出版で探求した方法が、より大きく商業的な出版物に反映されていくことは少なくない。違うのは、自分たちはそこから見返りを得ることがないことで、そういうことを考えると条件無しベーシックインカム[*8]についてもっと本気で考えるべきだと思うな。何にしろ、そうやって社会にも、文化に対する投資は必要だと思うし、その点では自分がやっていることはアート活動に近いとも思う。でもこれをアートとは呼ばない。

4. スイスで最も美しい本…英語ではThe Most Beautiful Swiss Books、スイスは4つの言語圏を持つので他に独、仏、伊の計4つの公式名を持つ。スイス文化局主催で年に1度、デザイナー、印刷所、出版社のいずれかがスイスに関わる本の応募を受け付け、その年の受賞本を10冊前後選び出す。同様の賞はヨーロッパ各国にあり、各国の受賞本から選出する「世界で最も美しい本」という賞が毎年ライプツィヒのブックフェアでお披露目される。
5. OOR…チューリッヒにあるレコード、アートブックを取り扱い、音楽イベントもたまにやるスペース。正式名はOOR Records。ゲノッセンシャフトとして運営さる（*6）。店名はヴァージニア・ウルフのOne's Own Roomから。「オーア」と読み、同じ発音のドイツ語単語Ohr（耳）にもかけている。エクスペリメンタルな音楽を多く扱い、既存のジャンル分けに囚われず独自の分類名でレコードを陳列しているのが素敵。筆者が好きな分類名は「don't buy it steal it」（very intelligent）dance」。ところでゲオルク氏は音楽を愛する運営仲間たちから、その（諸々に至る）精度の高さに因み「DJミリメーター」の二つ名を授かっている。[OOR Records：Anwandstrasse 30, 8004 Zürich]
6. ゲノッセンシャフト…Genossenschaft（独語）、「成員の自由意志に基づく契約によって形成される団体。職人組合や協同組合など」（大辞泉）。OORのような活動団体だけでなく、住居のゲノッセンシャフトというのも一般的である（家賃収入を得る大家ではなく、住居の持ち分に対する入居者自身による出資金によって運営されるため、比較的安価に良質な住宅に住むことができる、というもの）。
7. 「それを経て本が…」…ちなみに理論的に

○ 仕事とお金、それと贅沢 ○

お金についてはどう考えてる？

必要な支払いのためにお金は必要だけど、実際のところ自分はお金に関心はないね。もちろん自分のプロジェクトからお金を稼がないといけないけど、費やした時間を換金するために書き留めておくようなことはしない。誰かの納得を終点にせず、自分が納得できるところまでやってる。解決法はプロジェクト毎に必要で、決まった型なんてないから、毎回個々に探り直すことになる。新しいプロジェクトにとりかかるときはいつも、本って一体どうやって作るんだっけと思いながら、発見し直しながらやってるよ。効率優先にしたくないし、できないという気持ちもあるな。これはつまりプロジェクトの対価が5日分でも自分が納得するまで更に10日必要ならそこまでやるということ。自分はその方が納得できるけど、でもこれは自分が自分に対して対価を払って得ている贅沢だと考えてるし、これでやれているのは運がいいと思うよ。

それってあなたが自分のやってることを本当に楽しんでることが重要だね。

たまに、税金の書類を書いてる時とか、こんな働いて収入がこれだけなんて自分は馬鹿なんじゃないかと思えるけど、でも違う働き方をしてもっとお金を持ってても、それでやることは面白い本のプロジェクトだと思う。そう考えるといつも、目には見えないけど、自分は月に8000フラン[*9]稼いで、そのうち5000フランを自分のプロジェクトにつぎ込んで、その流れが本を存在せしめてるんだ、と言いたい。フィンクの隣の事務所の人は車を3台に別荘も持ってるけど、彼は彼のお金を車のポルシェに使うし、自分のポルシェは本なんだよ。

写真はすべてedition finkスタジオにて。
本のタイトルは文章に乗って現れる順に：
fink twice シリーズ／ Christa Ziegler, *Polis, Sammelkassette mit Fotopublikation und drei Zeitungsausgaben*／Daniela Keiser, *Ar & Or*／Anselm Stalder, *Glimmende Peripherie*

デザイン：斧澤未知子
写真：Juri Pfammatter [juripfammatter.com]

8. 条件無しベーシックインカム…スイスでは2017年6月にベーシックインカム導入についての国民投票が行われている。この時の決議は否決されたが、女性参政権だって否決された過去があることを考えると、国民投票をきっかけとして国民の関心が高まり理解が深まることでベーシックインカムが実現される未来だって夢物語ではないと希望も湧くというものではないか？「条件無し」は、受給のための条件を設けず、あなたが生きているというだけで支給される、という意味を強調する。ベーシックインカムをやろうという時に対象者を絞るのはナンセンスだよ。
9. フラン…ここではスイスの通貨、スイスフラン（CHF）。2018年7月2日の為替相場中値でCHF 1.00- は111.81円。
10. （写真）フィンクのスタジオに訪れると、まずはコーヒーの時間となることだろう。朝と昼と夕方とその他適宜、コーヒーの時間は大事である。しょっちゅうカフェに行かなくても自分のコーヒーマシンがあるから全然平気、だそうである。ちなみに物価が高いと言われるチューリッヒのカフェでのコーヒーの値段は参考までに中心部にある人気店ACIDでの値段を参照してみると：エスプレッソ4.00、アメリカン5.00、カプチーノ5.00、カフェラテ6.50（2018年7月1日現在、単位はすべてCHF）といったところである。[ACID：Langstrasse 67, 8004 Zürich]

ききみみずきんとは？

日本の昔話に出てくる、かぶると動物や植物の話を聞くことができる頭巾。筆者の英語も、そのような別の世界の覗き窓ではないか？

私の気持ちは止められない！

りゅうのドキドキ観光案内 純愛アタック!!

地底の森ミュージアム編 ①

みなさん、はじめまして。
自分を着飾ることでしか愛を伝えられない
うら若き乙女、泖（りゅう）です。
さて、ドキドキ観光案内「純愛アタック!!」は
私が服で愛を表現することによって仙台市域の
隠れた観光スポットの魅力をご紹介する突撃企画です。
今回は、約20年も想い続ける仙台市太白区の
地底の森ミュージアムさんに
溢れんばかりの愛を伝えさせていただきたいと思います。
地底の森ミュージアムさんは旧石器時代を生きた
人間たちの活動跡や森林跡を保存して
当時の環境と人間の活動を紹介しているミュージアムです。
旧石器時代と言えば、約2万年も前のこと。
ミュージアムの展示に包み込まれるだけで大昔の人と
一緒に生きているような気持ちにさせてくれます。
そんなロマンチックな地底の森ミュージアムさんが
私は大好きなんです。
この服で弱虫な私を隠して内なる情熱を装えば
いつもより魅力が増して、無敵になれる…！
準備は整いました。何も怖いことなどございません。
決めたの。もう、振り返らないって。
それでは、アタックしてまいります！

○企画・文／泖　○デザイン／スカイスター　○撮影／嵯峨倫寛

木と火と底のフンのジャンパー

○純愛度★★★★★
○地底度★★★★☆
○機能性☆☆☆☆☆

もう、意気地なしとは言わせない。透明袋に「木の根」と「焚き火跡」、「石器」、「鹿のフン」を貼りつけ、大胆にもTシャツの上から着用。

愛のゴールドTシャツ

○純愛度★★★★★
○地底度★★★★☆
○機能性☆☆☆☆☆

いつも心の中にはゴールドに輝くあなたがいます。初めて展示を目にした時の感動を胸に『地底の森ミュージアム』と書きしたためたTシャツ。

星空の樹皮柄ズボン

○純愛度★★★★★
○地底度★★★★☆
○機能性★★★★☆

すき。この気持ちに嘘はありません。樹皮のありのままの姿に墨を塗って転写しました。純白のズボンに溢れる想いを重ねた私だけの愛のカタチ。

落ち葉のズック

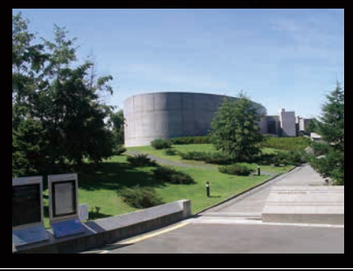
○純愛度★★★★★
○地底度★★★★★
○機能性☆☆☆☆☆

気づいたら、もう恋に落ちていたのです。旧石器時代に想いを馳せながら落ち葉を貼りつけたシューズ。

いよいよ、りゅうが愛の告白へ！現代人から愛を告げられた旧石器人、狩人の反応は？この恋の行方はいかに!?

次回予告

愛のカタチを服にのせて地底の森ミュージアムで無事、狩人に想いのすべてをぶつけたりゅう。しかし、りゅうのドキドキ純愛アタックは、これだけでは終わらない。果たして次回の舞台は?!



地底の森ミュージアム | SENDAI CITY TOMIZAWA SITE MUSEUM

地底の森ミュージアムは富沢遺跡から発掘された２万年前の旧石器時代の遺跡面を現地で保存し公開するとともに、発見された資料などから当時の環境と人間の活動を、いきいきとよみがえらせる展示をしています。
ミュージアム･シアター「狩人登場!!」では旧石器時代の狩人が不定期に現れます。彼らはいったい、どんな暮らしをし、何を思い、どんな明日を夢見て暮らしていたのでしょう？五感を研ぎ澄まし、時空を超えた体験に出かけて見ませんか？もしかすると、展示室や屋外の庭で狩人に出くわすかもしれません。ぜひ、彼らが何をしているか見て聴いてみてください。

〒982-0012 宮城県仙台市太白区長町南四丁目3-1　TEL.022-246-9153　○ 開館時間／午前9時～午後4時45分（入館は午後4時15分まで）
○ 休 館 日／月曜日・休日の翌日・年末年始・1月～11月の第４木曜日　※詳しくはお問い合わせください
○ 交　　通／仙台市営地下鉄南北線が便利です。地下鉄南北線「長町南駅」下車、西1番・西2番出口より西方へ徒歩約5分
○ 駐 車 場／25台（無料）　○ 入 館 料 ／一般 460円、高校生 230円、小・中学生 110円　※団体料金・共通入場券はお問い合わせください

あーぁ。頭の中が真っ白だ。

極度の緊張で血が通わなくなった私の手は紫に変色している。
いま、私は直接伝えなくちゃいけない。地底の森ミュージアムさんに、あの言葉を。 動け、私の口…!!!

出会いは今から約20年前。それは、私が小学生のとき。両親に連れてきてもらったのがきっかけだった。
チケットを買ってもらって入場した先には、木の根や枝と思われるものが無数に張られた空間が、大きく楕円形に広がっていた。
これが現代で見る約2万年も前の景色なの？ かっこいい。　まばたきが、できない…。

一目惚れだった。

この瞬間までは、母国や世界の歴史のことなんて考えたこともなかったのだから。

突如として、そこに巨大スクリーンが降臨した。 パチ、パチパチ、パチ…。
スクリーンでは旧石器人たちが焚き火をしながら生活を営んでいた。なんか作ってる…。 石器だ…！
本当にこの場所に大昔の人が住んでたのかな。どんな言葉で話してたのかな。友だちや家族と狩猟パーティーはしていたのかな。
「ほら、行くよ」。どのくらいの時間が経ったんだろう。声を掛けられるまで、そんなことを考えるのも忘れていた。
それくらい夢中に、私は食い入るように鑑賞した。

次の展示に移動する途中。森だ。小さなケースに森が詰められている。横を見れば、スイッチ。

…カチッ。

恐る恐るスイッチをゆっくりと押してみた。なんと、旧石器人が颯爽と現れたではないか。
パチパチ、パチ、パチ。 また焚き火をしている。幼心に、キレイな火だと思った。 旧石器人の生活する動きも、とても滑らかで感動した。
何度も、何度も、何度もスイッチを押して旧石器人に会おうとし続けた。 私は、またしても長時間立ち止まり、両親を困らせたのだった。

再び、地底の森ミュージアムさんを訪れた時には、実際に石のナイフで紙を切る体験をした。
まず自分の手に馴染む石のナイフをセレクトしなければならない。調子、次第で選ぶ石のナイフの形も変わってくる。
私はその日の手に馴染んだ石のナイフをしっかりと握り、紙を丸く切った。　いびつな丸だ。石のナイフで紙を丸く切る。

このシンプルな行為に隠された哲学は、他の施設では到底感じ取れるものではないだろう。

小学生から社会人になるまで辛いこともたくさん経験したし、悩んだりもした。
そんなとき思い出すのは、地底の森ミュージアムさんで出会った旧石器人たち。
友達とケンカしたとき、旧石器人たちはきっと「ごめんね」を言いに、友達のために焚き火を起こしにいくはず。
欲しい服が高くてどうしても買えないときは、あまりお金をかけずとも、きっと自分で素敵なアレンジを加えて好きなように新たな服を作ってしまうはず。
解決できそうにない問題にぶつかったときは、きっと解決できるまで自分でできることを考えて、もがき苦しみながらも、その過程をも楽しむはず。

だから、私もいけるとこまで、頑張ってみよう。自然と、そう思える。

長年、私を支えてきてくれた地底の森ミュージアムさんの旧石器人たちに
「ありがとう、これからもよろしくお願いします」の意味も込めて、この想いを告白したい。　一旦、深呼吸をしてから言おう。

こんなに緊張したままじゃ、素直な気持ちを伝えられないからね。

写真：ファンタビュー「旧石器人の活動」

SHOPPING of KENJI KONNO No.4

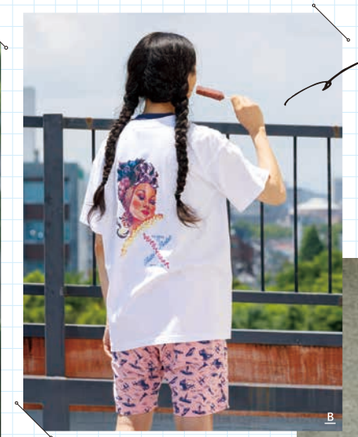
僕とTシャツと夏休み

コンノケンジのお買い物。

低価格の商品を消耗するサイクルに飲まれ、物を手に入れることのステイタスすら、かすんで見える昨今。私たちにとっての「お買い物」とはなんなのか？と立ち止まって考えるきっかけになる（かもしれない）、マイペースかつ実直な買い物通、コンノケンジの通販日記。

文・モデル／コンノケンジ　デザイン／スカイスター　撮影／磯賀 倫寛

A



NYからのTシャツを着ての"あずきアイス"最高です！

ここだけの話…実は不ぬ抜けです…

B

休日は、フットサルを楽しんでいます！

C

Ⓐ
価　格：$30.00　送料：$10.00
購入先：http://www.rosetattoonyc.com

Ⓑ Ⓒ
価　格：$30.00　送料：$23.50
購入先：https://smithstreettattooparlour.com

2018夏、NYからTシャツをおとりよせ。

Tシャツ。また買ってしまったTシャツ。通販でNYから2枚到着しました。Smith Street Tattoo ParlorというブルックリンにあるタトゥーショップのスーベニアTシャツです。背中に5匹の犬とオールドイングリッシュな書体でBROOKLYNと綴られたバックプリント。犬種はわかりませんが、みな穏やかな表情をしています。兄弟かな。もう1枚は、バックプリントに、少しうつむく憂い気な女性の顔とショップのロゴがレイアウトされています。また、左胸には同様のショップのロゴがプリントされており、これがかっこいいなと思い購入しました。なんならバックプリントはいらなかったくらいです。数年前にNYへ行ったときに、このタトゥーショップにこの犬のTシャツを買おうと立ち寄ったことがありました。店のドアを開けると屈強な男性（もちろんタトゥーだらけ）がおり、とても緊張したことを覚えています。結局目当てのTシャツの在庫がなく、買うことはできませんでした。通販はやっていなかったようですが、最近になって始めたようです。購入から到着までとても迅速でした。

数日後、NYの別なタトゥーショップから購入したTシャツがもう1枚届きました。Rose Tattoo Parlourからです。フロントポケットには氷のキャラクター、背中はショップの名前がプリントされています。ROSEの文字に雪が積もっているデザインです。ICEという文字に雪が積もっている製氷メーカーのロゴが元ネタだと思うのですが、それ以上に既視感があったのは、この製氷メーカーのロゴをあちこちで撮った写真だけが載っているジンを持っていたからです（今では行方不明ですが）。このタトゥーショップにもスーベニアTシャツを目当てに訪れたことがあり、友達のお土産としても購入しました。アーティストのCaliのあの文字のあのアーチのデザインです。また、日本から何度か通販でもピンバッジやTシャツを買っています。

一般的なタトゥーショップのスーベニアTシャツは、いかにもタトゥーなイカツイデザインなので、私の好みではありません（そもそも、怖そうなので入れない）。しかし、Smith Street Tattoo ParlourもRose Tattoo Parlourもスーベニアテシャツに所謂タトゥーのデザインを用いていない点で共通しており、つくることに対してのポリシーを感じました。また、購入しやすい価格も魅力的なのでお土産におすすめします。

来週ももう1枚TシャツがNYから届く予定です。今月3度目。。。

コンノケンジ

1985年仙台市生まれ。会社員。勤めている会社では、営業部に所属。これまで「家族写真」や「パンツ」など、さまざまなアイテムをマイペースに"お買い物"をご紹介。素敵な夏休みを目指してTシャツ、Tシャツ、Tシャツを買っている、今日も！

連載

雑草からパクチー

第4回

映画や文学を通して「仕事」を考える

佐藤豊（以下、**S**）　今日は映画や文学を通して、僕ら二〇代が仕事とどう接しているのか話せればと思い、その分野にあかるい河村実月さんを呼びました。実月さんは仙台出身ですが、共通の知人を介して東京で知りあいましたね。

河村実月（以下、**K**）　はい。仙台には大学までいました。いまは東京で文藝誌『園』を主宰しながら、文化が交わり生まれる場所をつくろうと準備しています。私はそもそも就職をするつもりはなくて、個人経営のカフェでずっとバイトをしていました。その頃から自分でお店というか場所、スペースを持ちたいと思っていたので、就職するよりも個人経営のところで働く方がいろいろな力を身につけられそうだなって思ったんです。それから、大学を卒業する段階で勉強が足りない、これで勉強終わりなの？　っていう気持ちがあって。

S　僕ら平成生まれはそういう人って多いかもしれないですね。あれ、これで終わりなんだ、って。僕も高専を卒業してすぐには働かず、東京の専門学校に通いました。

K　私は映画の宣伝、上映、配給に関する勉強がしたかったけど、仙台では難しい。バイトして貯めたお金もあったから、働きながら夜は映画の学校に通って勉強できればいいかなと思って上京しました。それでバイトしながら映画学校に一年間通ったんですけど、学んでみて配給会社や宣伝会社に属するよりも、もっと自分なりに映画と関われそうだなと感じました。受講生は宣伝会社や配給会社に就職することを目的としている人が多かったけれど、私は人と人との交わりが生まれる場所をつくりたかったんです。その手段として映画や本があるから。

S　映画学校を卒業してからはどうしたんですか？

K　その後はミュージックカフェバーの厨房で働きました。展示や音楽のイベントをやるようなところです。好きな文化で溢れていて、それをつないでいる、まさにいつか自分がやろうとしていることに近い場所でした。ホール希望だったんですけど、人がいないからキッチンの担当になって、どうしよう、私全然料理つくったことがない、まいったなと思ったけど、むしろ前向きに捉えることにして働きはじめました。働きながらご飯も食べられるし、料理ができるようになれば仕事以外でも暮らしに役立つなと思って（笑）。そこで三年くらい働いたのですが、一人で一日厨房に立つようにもなって、もうここでやることはやったのかなー、次のステップに行きたいなあと思っていた頃、職場の店のリニューアルが決まって、いよいよ場所を持ちたいなあというその場所も見つかり無事引っ越しもして、と、この春の話ですが転機続きでした。

S　無事にいい場所が見つかって、次の目論みは何ですか？

K　昨年文藝誌を創刊したこともあって、文藝誌の制作にも役立ち、かつ自分のスペースでも本を置きたいからという理由で次のステップでは本にかかわる仕事がしたくて。単発で製本工場のバイトをやったり、図書館や学校が購入する本の販売会で働いて、いまは書店の文房具売場にいます。書籍担当を希望したのに文具に配属されて、これカフェバーのときと同じだ、なんでこうなるのって（笑）。でもそれもきっと何か意味があるんだろうなと思って働き始めたらとても大事な仕事だって気がつきました。私はペンを長く使うほうではないんですけど、お客さんが芯を替えて長く使ってる初歩的なところ（笑）にも感動したし、休日に文具屋に行っていろいろ調べてるおじさんがいたりして、職場で働いてる人の姿がすごく良いんです。全然知らなかったけれど何やら尊い暮らしをしている人たちがいるぞって知ってとても安心しました。あと、近くに塾があってその子どもたちが来て、文具を買うことで計算の勉強をしてたりとか、そういうことが起こるのがいいなあって。ここも日々の勉強や、子どもの成長とかを支えてる循環の一つの場所なのかもしれないなと。書籍のほうにいたらできなかったかもしれない発見がたくさんあったんですよね。それと並行して、自分の家をさっき言ったみたいに交わりが生まれるスペースにしたいと思って、少しずつ準備してるような状況です。ちょっとずついろんなことに手をつけているのがコンプレックスでもあり、でも多様な場所をつくる上で一つ一つ意味があると思っています。

〈映画と仕事　ミランダ・ジュライ編〉

S　そんな中、今回は映画や文学を通して、仕事について考えていきたいと思います。

K　私は、ミランダ・ジュライ（＊1）が監督した二本の映画、『君とボクの虹色の世界』と『ザ・フューチャー』を挙げたいです。

S　『ザ・フューチャー』はお互い現在の自分に投影しやすい映画かもしれませんね。『君とボクの～』は邦題が残念でした。

K　めっちゃ借りづらい！

S　原題（Me and You and Everyone We Know）の直訳で『私とあなたとみんなが知っている』のほうがいいですよね。でも映画の中身は良かったです。大人の社会や仕事とは別に、子どもにも子どもの社会や仕事があって、大人は普段それを無意識に乖離してしまっているのかもしれないと思いました。

K　『ザ・フューチャー』は、自分が接するはずのなかった人た

佐藤豊（さとう・ゆたか）　福島県相馬市生まれ。グラフィックデザイナー。仙台のデザイン事務所を経て、現在は東京のデザイン事務所に勤務中。

河村実月（かわむら・みづき）　仙台市生まれ。文藝誌『園』主宰。エッセイ・コラムの寄稿、詩の発表など。文学や映画などの芸術に付随する場所をつくるために準備中。

ちと接していきますよね。それが私の現状に近くて。この映画の男性主人公は、いままでの仕事を辞めて木の訪問販売で家をまわったり、女性主人公も電話をあちこちにかけたりして、接するはずのなかった人と出会うことで自分たちのヒントを得ているような状態で。

S　ミランダの映画って、普通にしていたら会うはずのない人に積極的に会いに行っている感じがします。

K　それに対する憧れが私にはあって。見て取れる世界にいることに飽き飽きしているんです。自分の職場や家とか拠点を変えたのもそうだけど、もっと当たり前に予期せぬことが起こるところに身を置きたい。身内ばかりのところではなく、文具店のくだりでも話したように、全然知らなかったところでちゃんと尊い暮らしをしている人たちがいるってことをもっと知りたいし、触れていきたい。

S　ミランダが書いた短編集『いちばんここに似合う人』（岸本佐知子・訳、新潮社、二〇一〇）を読んでいても、日常の中のなんでもないところをものすごく特別なものとして受け取っていて、ミランダ自身がコミュニケーションの在り方をすごく考えてるんだろうなと思いました。いまみたいなネット社会になったのはほんと最近で、僕が小学生のときにインターネットが広まりだして、そのときは自分で検索しないと何も情報が得られなかった。でもいまは強制的に情報の波の中にいさせられている。それをミランダはポジティブに捉えているんじゃないかなあ。

K　むしろ活用して、どういうハプニングを起こそうか実験して楽しんでるところがありますね。（＊2）

S　そこがなんとなく実月さんとリンクするかも。

K　彼女の態度はずっと気になっています。

〈映画と仕事『パターソン』編〉

S　僕が挙げたいのは『パターソン』（＊3）です。この映画はパターソンという架空の街に住んでいるパターソンという男性が、バスの運転手をしながら誰にも見せずに毎日詩を書いてるという話なんですけど、パターソンは自分がやりたいことを仕事にしているわけではなくて、それが僕とは違っていて、羨ましく感じました。仕事は仕事として、別に好きなことをやって、自分にもできないのかなと思って。僕はずっとデザイナーになりたくて、運良く憧れてた事務所に入ることができたけれど、入社して三年目に頑張りすぎて体調を崩して、四年目の一年間はもうずっと辛かった。自分の中でやりたいことが実現しちゃって、これからどうすればいいんだろうって。そういう状況の中でパターソンを見て、いろいろと感じるところがありました。

K　私は『パターソン』を見たときに、世の中の反響ほどのぶち上がりはなく、あんまり感想が言葉にならなかったんですよね。主人公が日々のくらし、例えばバスの乗客を良く観察していたり、詩情の漂うところにいる、そういうのが尊いことは知っているなあというか、その当然の尊さを描いてるすごさはあるんだろうけれど……。過剰に大絶賛する雰囲気みたいなものに違和感があったんですよね。

S　パターソンが特別な人すぎるんですよね。スマホも持たないし、バスの運転手をしながら、毎日同じ生活を繰り返して、奥さんだけを愛して、奥さんだけに詩を書くなんて、きっとみんなできないと思う。僕はパターソンにとっての仕事が、自己実現のツールではないところにグッときました。

K　豊さんは仕事の中でデザインすることと、そうじゃないときにデザインしたいっていうこと、両方あると思いますが、その区別、違いがどうなっているのか気になります。私たちの年代って自分のやりたいことを仕事にするかどうか、選択ができるようになった時ですよね。私みたいに就職しないことが許されたのはそういう時代だからだと思うし。でも選択の自由が高まったからこその悩みもあるのかな。

S　僕は仕事とそうじゃないときの区別ってあまりつけられないです。最近はこの連載のように、文章を書かせてもらったり、デザインの仕事以外でも表現することに挑んでいますが、僕の中で文芸とデザインはある意味つながっていて、そこもはっきりとした区別がなくて。一方で、常に自分が何をやってるのかをしっかり認識していたいっていうのはあって。デザインの世界にいるからかもしれないけど、偶然の産物があまり認められないというか。現代って仕事と労働の区別もあまりないですよね。たとえつまらない労働をしていたとしても、その人に充実感があったらいい、それを大事な仕事だと思えたらそれは「仕事」になるみたいな。僕は昔から誰かと競うことが苦手で、他人より優れてることが必ずしもいいことだと思わないし、仕事に置き換えてもそうで、デザイン業界のヒエラルキーの中にいたくないんです。

K　デザインって軸が一本あるから、パターソンにとってのバスの運転手の時間が豊さんにとってはデザインの仕事で、それが終わったら詩を書いてもいいし、小説を書いてもいい。デザインの目線で見てきた言葉があるはずだから、いろいろやりようがあっていいんじゃないかと思います。豊さんのデザインするものも見たいけれど、むしろもっと文章だったり表面に出ていない側面を見てみたいんですよ（笑）。この連載のファンでもありましたから。手段を変えると本性が見えることがあるんじゃないかなと思う。それが見たいし知りたいですよね、ほんとうに近い部分みたいなもの。

〈文藝誌『園』について〉

K　私がつくっている『園』（＊4）という文藝誌は、出版のプロではない三人が集まってつくり始めました。いまは二人体制で、私はこんなんですし、もう一人はミュージシャンです。私は場所をつくりたいって気持ちから、本も一つの場所になりうるなと思ってやってます。こういうふうに生活してる私たちがつくれるものってなんだろうねって考えながらやってますね。本のプロじゃなくても、多様な目線、私たちなりにつくれるものをつくることに意味があるし、おこがましいけれど、それぞれのやり方でやって良いんだよって示せるのかなと。

S　昨年『園』が出たとき、本の仕事に携わる人からの反応が良かったと思うのですが、それはつくり手に「こういうものがつくりたい」という意思がはっきりとあって、それが受け手にしっかり伝わったということだと思うんですよ。

K　自分たちの手でやれることを盛り込んだ、身の丈にあったもの。風通しが良くてみんなが出入りできるようなもの。そういうものにしたいと考えました。

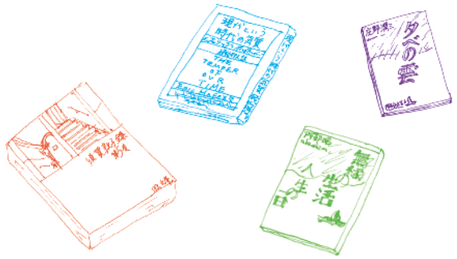
S　僕もデザインをするとき、「身の丈にあってる」かどうかをよく考えます。自分の関わり方というか、姿勢というか。とにかく下手な無理はしない。でも全力で頑張る。そこは通じるかもしれないです。みんな、かっこつけることに疲れちゃってるんですよね。

K　そうですね、いかに見せるか、みたいなことはもういいだろうって。それよりもっと手触りの部分をちゃんとしたい。つくる側もそうじゃないと納得できないですよね。

〈仕事と本〉

S　何冊か本も持ってきました。エリック・ホッファーの『現代という時代の気質』（柄谷行人・訳、ちくま学芸文庫、二〇一五）、これが本当にすごく良い本で。ホッファーは港で労働をしながら、思想家としても認められた人で、仕事と自分がやりたいことを分けていた、ある意味パターソン的な人だと思います。この本を読んで、個人レベルではなく社会全体が仕事と生活のバランスを見直す時期にきているのかなと思いました。実月さんはなにかありますか？

K　『園』の二号目をつくるにあたって、参加者が持ってきた本がこの本、阿部昭『無縁の生活・人生の一日』（講談社文芸文庫、一九九二）。その人からは庄野潤三も教えていただきました。この二人の本を集めて読んでますね。まさに自分の身を置きたい、置いていきたいムードみたいなものにぴったりだったんです。ずっとこう在りたいと思いますね。



S　僕はもう一冊。ウンベルト・サバというイタリアの詩人で、須賀敦子（＊5）が訳しているんですが、その中にちょうど「仕事」という詩がありました。サバが晩年に書いたものらしいです。

ずっとむかし、
ぼくは楽々と生きていた。土は
ゆたかに、花も実も、くれた。
いまは、乾いた、かたい土地を耕している。
鍬は、
石ころにあたり、蔽につきあたる。もっと深く
掘らなければ。宝をさがす人のように。

（須賀敦子全集　第5巻）河出文庫、二〇〇八に収録）

S　自分がいくらいま頑張っていたり満足していても、それで人生は終われない。いつまでも頑張り続けないと人生は終われないんだよと言われてるような気がしました。自分が頑張ろうとしてるもの、いつまでも頑張れるものって一体なんだろうって。

K　『ザ・フューチャー』にも通じてますね。いつまでも完成しない、終わらないことを始めている状態。

S　あえて終わらせないのかもしれないですね。

K　終わらないから残す。

S　僕は、詩やポエティックなものに良い悪いはなくて、「ただある」ものだと思うんです。パターソンが自分の詩を本にしないのも、詩が社会とつながるツールじゃないから。この詩を読んで少し楽になった気がします。

K　やっと『パターソン』の反響に対する違和感が腑に落ちたかもしれない。詩情ってあるだけなんだよ、その映画の良い悪いとかを。SNSで発信しまくるのはなんか違うぞと（笑）。仕事にしろ何にしろ、やって行けば選択肢の枝がまた延びて広がっていくのはいいことかもしれないですね。私の場合は映画、料理、本、といろいろ寄り道していますが……。豊さんもデザインがあるからこその言葉を持っているし。寄り道するのもいいですよ。

S　何か一つのことを頑張る時間も必要なんだけど、さまざまなことに目を向けているからこそ気がつけることもたくさんありますよね。僕も実月さんも、すでに一つの拠り所を見つけているのだから、まだまだたくさん寄り道をしていいのかもしれないですね。

二〇一八年六月二〇日　東京・阿佐ヶ谷 gion にて

構成・脚註：高橋創一

脚註

＊1　一九七四年生まれ。パフォーマンス・アーティスト、映画監督、作家、女優、ミュージシャンなど幅広い分野で活動を行っている。邦訳された著書に『いちばんここに似合う人』（あなたを選んでくれるもの）（岸本佐知子・訳、新潮社、二〇一五）がある。

＊2　ミランダ・ジュライは二〇一五年、スマートフォン用のアプリケーション［Somebody］を公開（現在は終了）。メッセージを伝えたい相手本人ではなく、GPS情報からその周囲にいる赤の他人にメッセージを送信、受信した人は写真からその相手を探し、感情を込めてメッセージを読み上げるというもの。ここにも、ミランダのコミュニケーションにおける偶然性、直接性への志向が見て取れる。

＊3　ジム・ジャームッシュ監督、二〇一六年製作。アダム・ドライバー、ゴルシフテ・ファラハニ主演。タイトル、そして主人公の役名である「パターソン」は二〇世紀アメリカを代表する詩人、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズへのオマージュとなっている。

＊4　二〇一七年七月、創刊号発行。第二号は二〇一八年七月二一日発売。仙台ではKANEIRI MUSEUM SHOPなどで取り扱っている（二〇一八年六月現在）。http://www.sonomagazine.jp/

＊5　一九二六年生まれ。随筆家・イタリア文学者。二九歳から四二歳までの二三年間、イタリアで暮らす。その経験を元にして書かれた随筆は、「最も徹底してヨーロッパを知ろうとして、しかもその姿勢において大変誠実であった」（池澤夏樹）姿をありありと刻んでいる。翻訳家としてはプルーノ・ムナーリ、アントニオ・タブッキなどを手がけ、イタリアの辺境トリエステに生きた詩人ウンベルト・サバについては長い間その翻訳にこだわり続けた。一九九八年没。

プロフィール

佐藤豊（さとう・ゆたか）　一九九〇年福島県相馬市生まれ。仙台のデザイン事務所を経て、二〇一四年より有限会社服部一成に勤務。個人での仕事や文筆等も行う。最近の仕事に「コンニチハ技術をシテノ美術」のビジュアルデザインや書籍の装丁、「イ・ラン　来日仙台公演」の宣伝デザインなど。

河村実月（かわむら・みづき）　文藝誌『園』主宰。元コックで文筆家。過去には地元仙台で、zine と音楽のイヴェント『GHOST WORLD』を主宰。上京後も zine の制作やエッセイ・コラムの寄稿、文藝誌『園』では詩の発表など、活動の幅を広げる。文学や映画などの芸術をこよなく愛し、それらに伴随する場所をつくるために準備中。園では、販売、広報、企画、インタビューなどを行う。

ROSEBUD TAROT READING 夏秋の運勢

1月生まれ

<**近い未来**>自分の利益を求めずに人をつなぐこと、関係性を育むことが飛躍のポイントです。他者を思いやって行動することで輝きが増すでしょう。
<**キーワード**>羽根。友情。きれいな水で育つ植物。14。<**メッセージ**>ひらめきやアイデアをよく考えるときです。感情に流されずに、時を待って。

2月生まれ

<**近い未来**>約束や計画が延期になるかもしれません。執着を手放し、自分の願望を明確にすることで新しいものを受け入れる準備が整います。<**キーワード**>天使。コスモス。ボランティア。20。
<**メッセージ**>言いたいことや伝えたいことは、後で伝えましょう。タイミングを外すことで救われるでしょう。

3月生まれ

<**近い未来**>新しい出会いや状況の新展開など、変化とチャンスに富んだ時期です。学習能力も高まり、ものごとは大きく動き、人生の転機が訪れます。
<**キーワード**>青空。時計。運動。マンダラ。10。<**メッセージ**>待っているだけではなく、門をたたきましょう。少しの勇気と努力が成功を導きます。

4月生まれ

<**近い未来**>決断の時期が近づいています。正しい判断をするためには、何かを切り捨てるよりもその課題を共存させる方法を選ぶ方が吉。<**キーワード**>満月。ネクタイ。ものさし。衣装。11。
<**メッセージ**>たとえ期限が過ぎてしまったとしても、約束を守りましょう。自分自身を守ることにつながります。

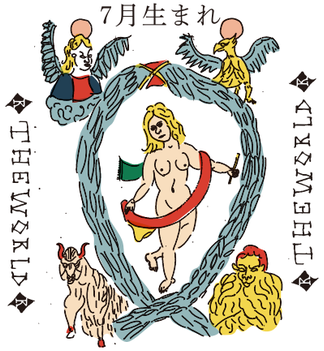
5月生まれ

<**近い未来**>起業や独立など、自立できるタイミングが訪れます。副業を見つけるかもしれません。社会や人々に貢献するような事業に関わる可能性もあります。<**キーワード**>ミラクル。いちじく。Book。三日月。2。<**メッセージ**>準備が整えばサインはGOです。信念と誠実さがあなたを導くでしょう。

6月生まれ

<**近い未来**>問題を抱えているプロジェクトや手に負えない事態は手放しましょう。立場に捕われずに諦める方が吉。古きものが崩壊して、インスピレーションが訪れます。<**キーワード**>冠。引っ越し。電気。16。<**メッセージ**>隠しごとをせずに手の内を見せることで困難をチャンスにすることができます。

7月生まれ



<**近い未来**>自分の深い部分を探る時期です。周囲は目まぐるしく動き、自分だけが取り残されているように感じるかもしれません。深く考えた後に答えが出ます。<**キーワード**>プール。人魚。ペン。21。<**メッセージ**>息苦しさを感じたら、心と体のバランスをとりましょう。あなたは守られています。

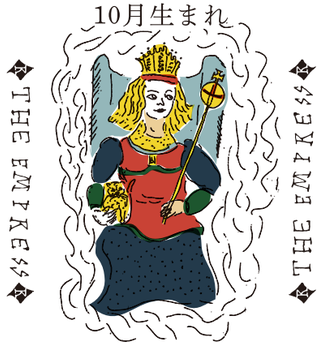
8月生まれ

<**近い未来**>研究や学習に没頭するのにいい時期です。自己投資のための静かな時間をつくり、今後の計画を立てましょう。<**キーワード**>道しるべ。キャンプ道具。杖。9。<**メッセージ**>ものを大切に、少ない道具で丁寧に暮らすことを心がけましょう。将来のためのシンプルで本質的な生き方がテーマです。

9月生まれ

<**近い未来**>進路や目的の方向性を見直すときです。一旦立ち止まって足下を見る余裕を持ちましょう。スムーズにいかない旅行は慎んだ方が安全です。<**キーワード**>グラウンディング。誕生。猫。0。<**メッセージ**>目線を変えてものごとを考察することで、新たな突破口が見つかるかもしれません。

10月生まれ



<**近い未来**>過去の自分から脱皮して行動を起こす時期がやってきます。長い間そのままにしておいた慣習をあらため、勢いに乗りましょう。<**キーワード**>金星。花。自然療法。3。<**メッセージ**>調和をはかろうとすることで主導権を得ます。過剰になり過ぎずに、バランスよくものごとをとらえましょう。

11月生まれ

<**近い未来**>立場を守ることから離れ、自ら行動するときです。現場へ赴き、自分の目と足で情報を得ることが成果をあげることにつながります。<**キーワード**>営業。力。仕事。4。<**メッセージ**>地位や権力に固執せず、ときには利害を求めない関係を築きましょう。安心できる仲間になれるかもしれません。

12月生まれ

<**近い未来**>前進するにはコントロールする技術と先を見通す目が必要となります。誰をリーダーとし、何を使うのかを考えることで新たな道を見出すでしょう。<**キーワード**>スペイン。建築。天体。7。<**メッセージ**>誘惑に打ち勝つ、欲望を抑えるがテーマ。異国の装飾に触れてみるのもいいです。

タロットリーディングでは、出たカードの向きが正位置（上下が正しい）か、逆位置（上下が逆さま）かによって占い結果が異なります。が付いているものは逆位置の結果です。

文＝ROSEBUD　絵とデザイン＝吉田勝信
ROSEBUD＝1994年、タロットリーディングをはじめる。「はからめ月のカレンダー」の製作、出版を通して、暦を日々の暮らしに取り入れることを提唱。http://hacarame.com/mind/tarot.html

あとがき

働くことをテーマに特集を組みたいと思ったのは、「仕事がない」という理由で地元に残る／帰ることを諦める人が多いという話をよく聞くから。ということは特集の導入部にも書いた通りだが、もしかしたらそれと同じくらい自分が今働き方に悩んでいるからなのかもな、と制作を進めていくうちに考えるようになった。今年の12月でフリーランス生活も丸４年になる。家のこともそれなりにきっちりやりながら仕事の方もステップアップしていきたいなと思いつつ、なかなかその足がかりをつかめないまま日々過ごしてしまっている。悩んでいる、というとちょっと大げさだが、若干のくすぶりがあることは確かだ。とまあそんな心境でお聞きした4名の方々のお話。みなさんに共通していたのは、一切ごまかしをしないということ。どんな小さな違和感も見て見ぬ振りをせず、どんな大きな課題にも立ち向かい、知恵を絞りアイデアできっちり解消してきたからこその今なんだろうなと感じた。何をあたりまえのことを、と言われてしまいそうだが、これを書きながらもいくつか先延ばしにしていることが私の頭には浮かんできている。それらを確実に片づけることから、はじめようと思う。

『とうほくあきんどでざいん2018夏号』、最後までお読みいただきありがとうございました。今年度中にあと２号発行予定ですので、楽しみにお待ちいただければと思います。引き続きおつきあいのほど、よろしくお願いいたします。

編集長 工藤 拓也

BACK NUMBER

バックナンバーはあきんど塾ウェブサイトにて公開中!! [http://tohokuakindodesign.jp]

Vol.1 2017 夏号
「あきんど
-縁の下・水面下・滲み出る-」
※残部なし・絶版

Vol.2 2017 秋冬号
「デザイン」
※残部なし・絶版

Vol.3 2018 春号
「東北」

『とうほくあきんどでざいん』とは?

公募で集まった仙台市域のクリエイターが中心となり、2週に1度公開編集会議を行いながら制作している冊子です。2017年8月の創刊から、毎号チャレンジを最優先に細部のブラッシュアップを重ね、4号目となる今号では初めて編集長とアートディレクターを応募者の中から選出し制作を行いました。冊子制作をクリエイターの学びの場とする本プロジェクト（若手クリエイターの人材育成事業）は、今後も続きます（5号目、6号目が今年度中に発行予定）。お読みいただき感じたこと、考えたこと、なんでもかまいません。事務局までお寄せいただけましたら幸いです。

とうほく あきんど でざいん 2018夏
2018年8月 発行

協働クリエイター／おもに公募により集まった仙台ゆかりの15組　編集長／工藤拓也（sponge）　アートディレクター／伊藤典博、安保満香（合同会社スカイスター）
編集／とうほくあきんどでざいん塾　〒984-8651 仙台市若林区卸町2-15-2 卸町会館5F TRUNK内　発行／仙台市経済局地域産業支援課、協同組合仙台卸商センター

© 2018 Tohoku Akindo Design Juku. Published in Japan All rights reserved.
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。本書の無断複写・複製（コピーなど）は著作権法上の例外を除き禁じられています。
代行業者などの第三者による本書の電子的複製も認められておりません。なお、この本についてのお問い合わせは、下記宛てにお願いいたします。
お問い合わせ先:とうほくあきんどでざいん塾　TEL:022-235-2161

協働クリエイター略歴 (50音順)

板橋友幸（いたばし・ともゆき）
仙台市生まれ。グラフィックデザイナー。主に紙媒体の広告デザインを手がける。クライアントと一緒に受け取る側の気持ちになって仕事をするのがモットー。2017年より卸町のTRUNKにてフリーランスで活動中。カヤックと登山が趣味。

エンドウナツミ
1993年生まれ。興味があるものにはまず触れてみる、やる気と瞬発力が持ち味の新人クリエイター。見た人の心がほころび、自然と目に留めてしまうような魅力あるものをつくれるよう、日々精進している。趣味は釣りやゲームを始め、興味のあるものを幅広く。

斧澤未知子（おのざわ・みちこ）
[P30参照]

北村洸（きたむら・こう）
1990年石巻市生まれ。webデザイナー。ユーザーにとって効率的で気持ちのいいUI・UX設計を心がけてデザインする。コンセプトワークの段階からクライアントと対話を重ね、構成を練り上げていくことが得意。

工藤拓也（くどう・たくや）
1982年仙台市生まれ。コピーライター。キャッチのような短いものから取材記事のような長いものまで書き、企画や編集も手がける。うれしいのは、ボディコピーがうまく書けたときと、小難しい話のおもしろさを伝えられたとき。本誌編集長。

くろさわかな
デザイナー。webサイト制作、印刷物のデザインなどを手がけている。ざっくりとした内容を形にすることが得意。目指すは見た人が思わずニヤリとしてしまうようなものづくり。好きなものはパンとグラノーラと眼鏡と髭。

黒澤みかん（くろさわ・みかん）
[表4参照]

合同会社スカイスター
伊藤典博（いとう・のりひろ）
静岡県三島市生まれ。デザイナー。
安保満香（あんぼ・みちか）
岩手県八幡平市生まれ。デザイナー。
広告／ロゴ／イラストレーション／パッケージ／インクルーシブデザインなどの制作に取り組んでいる。本誌アートディレクター。

コンノケンジ
[P38参照]

嵯峨倫寛（さが・みちひろ）
1980年宮城県石巻市生まれ。写真家／フォトグラファー。広告分野を中心にフリーランスとして活動。「想像の幅」があることに写真の魅力を感じている。被写体からそれ以上のものを伝えることが、自分にとっての写真である。

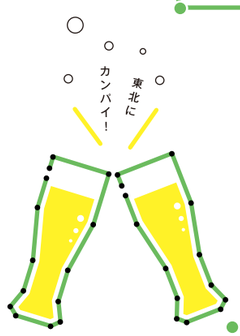
佐藤豊（さとう・ゆたか）
[P39参照]

平山エリー（ひらやま・えりー）
仙台市内の広告会社に勤務。仙台でおもしろく生きていくために、いろいろと修行中。"Always look on the bright side of life."をモットーに生きている。

吉田勝信（よしだ・かつのぶ）
1987年東京都生まれ。デザイナー。「民俗」の延長としてデザインを思考。家業「台所草木染め結工房」（仙台市）のブランディング、日用品の設計など多様な領域でコンセプトメイキングとそのビジュアライズを行う。

渺（りゅう）
1992年宮城県角田市生まれ。2016年より「書」や「書道」の枠にとらわれず墨をつかって文字や柄を描く。樹皮や雑草、石などの自然物に墨を直接塗って和紙に転写した作品を多く展開している。

ROSEBUD（ろーずばっど）
[P42参照]



とうほくあきんどでざいん塾

コーディネーター

長内綾子（おさない・あやこ）
1976年北海道生まれ。Survivart主宰。2011年11月、震災を機に仙台へ移住。現代美術とビジネスの両方の現場で、問いを立て応答を引き出す場の設計、およびキュレーションを行っている。

松井健太郎（まついけんたろう）
1980年福島県生まれ。グラフィックデザイン事務所BLMU代表。エディトリアルデザイナー。建築・プロダクト・グラフィックなど分野にとらわれない"ものづくり"を中心に、地域とクリエイターを結ぶ活動も展開中。

アシスタント

深村千夏（ふかむら・ちか）
1984年宮城県石巻市生まれ。大手エステサロン勤務、さまざまなボランティア活動への参加を経て現職。コーディネーターをサポートしつつ、TRUNKの受付業務を担う。個人では、"週末セラピスト"としてエステ技術を提供している。